

高林武彦さんはいろんな面でユニークな人間であった。理論物理学者、科学史科学批評家として知られているばかりでなく、詩人でもあった。そして実はこの詩人としての性格が彼の業績のすべてを規定している。

物理学者としても彼の経歴はユニークだ。一般教養は京都学派の自由な空気の中で身につけ、専門の物理学は（家からの自由をもてめて）東京で学んだあと、名古屋大学に就職する。京都、東京、名古屋はそれぞれ湯川秀樹、朝永振一郎、坂田昌一という日本の三大理論物理学者の根城となった処である。高林さんは遍歴の結果として、この三人から直接影響を受ける一方、彼らを間近で観察する機会を得た。めずらしく幸運な物理屋だといえる。

高林さんの生きた年代もユニークだ。彼は自分が戦前派と戦中派との境目に位置するものだと書いている。1930年代の軍国主義のなかで成長し、繰り上げ卒業のあと軍隊生活はどん底から始めた。やがて軍事研究にも携わった。こういう経歴の学者はたしかに少数だろう。私は東大で彼の一年下だったから戦中派ということになるが、以上の点では彼と同じ経験をしてきた。そんなわけか晩年になって私は彼と同感するところが多く、特別親しみを覚えるようになった。しかし学生中にはただ彼の存在を知っていた程度だった。いま頭の中に残っている彼の軍服姿のイメージは多分戦争の直後に本郷で見かけものだろう。

私はそのうちにアメリカに渡ってしまったので、高林さんの戦後の行動については、1960年代にたまたま仕事の関係で接触するようになるまでなにも知らなかった。仕事の内容についてはあとで述べることにして、彼はどうも実生活ではたいへん不器用な人という印象をうけた。一度シカゴにご夫妻で来られたとき、私の家でパーティーをひいた。彼は会話にも乗らずソーファに腰を下ろして独り何か考えにふけていたようだが、前にあった皿の中からわさびの大きなかたまりをふと摘んで口に入れた。たちまち彼の眼の玉が白黒になった。高林さんといえば、これがいまでも我が家の話題にでてる。

研究の上で高林さんとは何回か一緒になった。ロチェスター大学、スウェーデンのイエテボリ、フェルミ国立研での学会やカリフォルニア大学のロサンジェルス・キャンパスでの研究会など。学会講演は時間が制限されているから、講演者はその範囲で話をまとめるように訓練されているものだ。ところがどの学会でも高林さんは用意した長い原稿をそのまま朗読する、まるで聴衆や時間のことは全く念中にならないように。時間が切れて進行係が何度か警告しても効果がない。見ている私は気が気でなかった。

晩年になって高林さんは昔の哲人といった風格をそなえてきた。これは見かけばかりではない。数年前にエッセイ集（「ヴァリエテ」）を送って頂いて、始めて彼が本格的な詩人でもあることを知った。しかし悲しいことには彼の余生が長くないことが添え手紙の中にほのめかされてあった。一年あまりたってから彼の自叙伝「我が若き日の思い出」（本書

第2部1章)が送られてきた。その内容が私にショックを与えた。私がほとんど忘れていた戦前戦中の精神的肉体的苦痛が生々しく記録されている、私よりもずっと知的に成長していた彼の分析にしたがって。その中に軍隊で1日「平均」26回ビンタをくらったと書いてある。科学者らしい記述だが(偏差値もあればよかった)、私が体験した「軍隊の本領は要領なり」という軍人勅諭まがいのモットーは到底彼には実践できなかっただろうとおもった。

さて高林さんの学問的業績について語ってみよう。科学史や科学論については四冊の主な著書のほかに、多くの寄稿文や学会講演などがあるようだ。これらの著作は彼の年とともにだんだんと独特の性格を現してきている。物理学の歴史は物理学者の歴史でもある。個々の発見発明と、それを実現した個々の学者の性格や背景とが切り離せないことが彼の見方のユニークな点であろう。彼は的確な歴史感覚と鋭い感受性を持ち、詩人の直感で批判する。一言でずばりと本質を衝く見事な表現力をもっている。いわば殺し言葉の名人だ。有名な学者たちのバックグラウンドについて普通の科学史には書いてないことやその隠れた意味を私は何度も彼から学んだ。たとえば湯川とボーア、朝永とディラックは似ているとか、湯川のマルのアイデアがフロイトやユングを想わせる(「ヴァリエテ」など、無意識のうちに私の頭の中に定着してしまった。ウィットに富んだ皮肉的な観察も面白く、本書冒頭の「方法的断片」の中にその片鱗が見られる。

しかし高林さんは単なる科学批評家ではなかった。素粒子論以外に、物理学者としての幅も広がったことを私は「若き日の思い出」から始めて知った。軍隊での仕事は物質工学に属し、名古屋大学ではコロイド物理にも大いに貢献があったようだ。素粒子論についてはこの書にはあまり出てこないが、湯川さんの思想に影響されて、粒子の空間的内部構造に興味をもっておられたので、私が追求していた無限成分波動方程式とか弦模型とかでたまたま仕事に関連が出てきたわけであった。1960年代の後半に高林さんは二、三度アメリカに來られて私と議論したことは忘れられない。彼はこの問題についていくつかの長い論文を書き、著書の一つ、「素粒子論の開拓」のなかでも詳しく紹介している。

高林さんを高林式に一言で表現したら、哲学詩人的観察者だったと私は考える。観察は受動と能動の中間に位し、解釈をもともなう。観測といつてもよい。彼はあらゆる思想や知識をむさぼるように吸収しても自分が飲み込まれたり、あえて博打をうって出たりすることはなく、自身の独立を大事に守った。マルクス主義に影響されても一辺倒にはならず、寺田寅彦の日常の物理をも評価して坂田さんを憤慨させたそうだが(「若き日の思い出」10節)、これは現在の物理学の新しい傾向を予言したような発言でもあった。量子力学における観測の問題(第1部「量子力学と実在」)は彼にふさわしいトピックであっただろう。最後に「去りゆく者の影」で彼は自らの生死の問題に雄雄しく取組んだ。自分自身を観測しようとした。彼の純真さに頭がさがる。